

外世界から・イスラーム世界

鈴木 董

まず話題提供として「世界・文化・文明」について論じ、後の討論で論じて頂きたい。

この地球をいくつかの特徴的な世界に区分しようとする場合、様々な基準が考えられる。その典型としては、「物理的生物的環境」（物理的環境＝自然地理的環境、生物的環境＝生態的環境）を基準にした区分がある。これは、「客観的基準」にしたがった区分と呼ぶことができる。また他方の極として、人間を中心にして世界を捉えていく「主観的基準」に基づいた世界区分のやり方もある。また高谷さんの提唱されている「世界単位」というものも、世界区分の一つのやり方であると思う。それは、一方で物理的生物的環境、地理的生態的環境を前提とし、同時に、そこに住む人々が共通の意味づけの体系、つまり同一の世界観を持つと考えた時、そこに「世界単位」が成立すると考えている。従って「世界単位」は、「客観的基準」と「主観的基準」を組み合わせた世界区分の試みである。「世界単位」は一つのまとまった生態・社会文化複合といってもよい。

さて、「主観的な基準」に依拠して「世界」を考えようとする時には、「文化」の問題がある。私は文化というものを、意味の体系ないしは、集団成員が集団の成員として後天的に習得する行為のくせの総体と考えてはどうかと思う。このように考えた文化には、大小様々なものがあり、文化を共有するもののテリトリーを「文化圏」と名付けた場合、大小様々なレベルの文化圏が想定される。大小様々な文化圏の中で、多数の小文化圏を包摂しながら、なお一つの特徴的な体系性を示すような大きな文化圏を「大文化圏」と呼びたい。このような大文化圏では、人間の住む世界についての独自の秩序の観念が成立しているので、これを「文化世界」と名付けてもよい。「文化世界」ないしは「大文化圏」という形で、「物理的生物的環境」はとりあえず背景に置き、「主観的基準」にのみ立脚する世界の概念を構成することもまた可能である。しかし「文化世界」を内部的に見てみると、それは複数の小文化圏を含み込み、同時に物理的生物的環境にも多様なものがある。従って、「文化世界」というものは、同時にその中に複数の「世界単位」を、包摂する場合もありうるといえよう。

「文明」と「文化」の両概念は、一元的なものではなく、むしろ二元的な意味を与えて利用する方が便利であると私は思う。先に「文化」の概念を述べたが、ここではむしろ、人間の側の意味づけによって成立するもの、同時に「特殊性」を中心にして成立するものと考えたい。これに対して「文明」は人間の外的および内的な制御と能力の総体と考える。制御という時、この様な形で「文明」というものは、「普遍性」において捉えうるものだと考えたい。但し、

二元的といっても、かつてのドイツ学派のような物質的なものと精神的なものの二元論という捉え方や、また文明と文化を価値的に上下関係に置く考えはとらない。ただ、この二つの言葉を使って人間の営為を捉える際に、二つの異なる側面を相互補完的に捉えたらどうかと思う。

この様に考えると歴史の流れは、文明の歴史的な流れと、個々の場所・時における文化の刻印とから統一的に捉えることができる。かつて「旧世界」においても、いくつかの大文化圏（文化世界）が生々流転を遂げ、18世紀から19世紀に入り、近代西欧世界が圧倒的な影響力を及ぼすに至る直前になっても、旧世界において、複数の文化世界が並存していたと思われる。

例えば、それを外から見てとりやすい表現形態に即してみれば、文字圏として捉えることができる。つまりラテン文字圏、ギリシャ・キリル文字圏、サンスクリット文字圏、漢字圏、そしてアラビア文字圏である。従って「文化世界」として「イスラム世界」を捉えると、それはアラビア文字圏と言い替えることもできるだろう。しかしこのような各文化世界の相対的な自己完結性というものは、18～19世紀にかけて「近代西欧」の挑戦を受ける中で非常に大きく変容し、自己完結性は溶解したかのように見える。他方では、各部分が不可分に結び付いたグローバルなネットワークとシステムが徐々に成立し、各文化世界はそのサブ・システムと化したかのように見える。ここで、すでに見たように、かつて相対的な自己完結性を保持していた個々の大文化圏（文化世界）は、その中にさらに通例いくつかの「サブ文化圏」ないし「小文化圏」を包含していた。今日、地域と呼ばれているもののうち、少なくとも一部分については、このような一つの大文化圏（文化世界）の中のサブ文化圏（小文化圏）であるかと思われる。イスラム世界のケースに即してみれば、イスラム世界の中核をなしてきた中東はよく言われるようにアラブ圏、トルコ圏、イラン圏という三つのサブ文化圏に分かれる。そして、アラブ圏・トルコ圏・イラン圏も、それぞれ今日では地域とも呼ばれている。

次に、「文化世界」としての「イスラム世界」についてみてみたい。イスラム世界というものが成立するなら、それを一つの文化世界たらしめている諸要素があるわけだが、その基軸は、そこに生きている人達の大多数が共有するに至った、共通の価値体系としてのイスラムであると思われる。イスラムとは、唯一神アッラーに帰依することを意味するが、帰依したムスリム達の間には、非常に強い普遍的な連帯感が歴史的に育まれていったと見ていいだろう。そして彼らにとっては、王朝や民族や地域等への帰属意識よりも、むしろイスラムへの帰属意識が強い。従って、自らの「文化世界」と他の「文化世界」との境界もまた、イスラムとの関係で確定し、「イスラムの家」と「戦争の家」とに二分するというイメージに基づく世界秩序の意識が育っている。一般的に言って、特有の世界秩序観に根をおいた広汎な広がりを持つ世界が成

立したとき、そこには一つの「文化世界」が成立したと言ってよいだろう。また彼らは、聖戦を通していつの日か「戦争の家」が「イスラムの家」へと包摂されていくという、特有のヴィジョンを持っている。このヴィジョンを伴った世界秩序観が形成され、共有され、それによって人々が支えられ、一つの文化世界を形成している。「イスラムの家」であるイスラム世界というものは、多くのムスリムにとってムスリムの普遍世界として意識されている。それゆえ、それを土台に各地のムスリムの間で、国家や民族を越えたネットワークが成立し、それにそって国家間・地域間の広汎な移動の世界が現実的に機能している。

また、共通の価値体系の一つの派生体として言語と文字が挙げられる。アラビア語を母語とするアラビア半島のアラブの間で成立したイスラムが、アラビア半島の外へと急速に拡大するに従い、聖典たるコーランの言葉であるアラビア語も徐々に広がっていった。アラビア語が拡大していく中で、非アラブの様々な民族が、従来の母語をアラビア語に替えた。そしてアラビア語を母語にした人々の大多数の間では、同時に従来の民族的帰属意識が風化して、アラブ人意識をもつに至った。アラブ化の進行しなかった地域においても、アラビア語は少なくとも宗教の言葉として、さらには一種の「文明語」として人々に共有されていった。こうして知識人の間においてはアラビア語が共通語化していく。もう一つのアラビア語の影響は、非アラブ系の諸言語へのアラビア語の語彙の浸透がある。この二側面でアラブ化が進行した。そしてさらにムスリムが活躍した地域の諸言語において、書き記すための文字としてのアラビア文字の受容、すなわちアラビア文字化が進行した。こうして漢字圏に匹敵するアラビア文字圏が成立した。

またさらには、良きムスリムたるための行為規範として、シャリーアも欠かすことができない。イスラム化の進行とシャリーアの浸透の中で、共通の習俗と制度がかなり広汎な人々によって共有されることとなり、そうなるまで背景を異にしていた諸地域に住む人々の生活もずいぶん変わる。そしてそのうちに、この外来的な要素も、そこに住む人達の中に内面化し定着した。言い替えば、「外文明」の一片として入り込んで来たものが、各地域の様々な人間集団の中で、「内世界」の不可分の一要素となっていったという面もあるのである。

このように外来的なものから内在的なものへと転化するなかで成立していった一つの「文化世界」としてのイスラム世界は、7世紀初頭以降、長い歴史の中で拡大し変容してきた。まず7世紀中葉から8世紀中葉の最初の形成拡大の時期に、中央アジアから、アナトリアを除く中東全域を経てイベリアに至る地域が、ほぼイスラム世界に包摂された。その後、11世紀から15世紀までの第二の拡大の時期には、一方で、イベリアがレコンキスタで失われながらも、他方では北インド、アナトリア、少し遅れて現在の東南アジアの一部においてもイスラム化が進行

していった。

イスラム世界の内部には、すでに少し触れたように地域的偏差もある。イスラム世界は東は中央アジアから西はマグレブにまで広がる大文化圏であるが、膨大な空間を占めるこのイスラム世界の中には、複数のサブ文化圏が含まれている。コア地域にあたる今日のいわゆる中東地域の場合、住民の母語のアラビア語化に基づくアラブ化が進行したアラブ圏、アラビア文字化は進行したが、アラブ化は進行しなかったイラン圏とトルコ圏が顕著なサブ文化圏として認められる。また、この文化世界は、複数のサブ文化圏を含んでいると同時に、かなり多様な物理的・生物的環境世界を含み込む複合体としての構成を有しているとも言える。そして、一つの文化世界としてのイスラム世界は、このようないくつかのサブ文化圏（小世界）と、複数の特徴的な物理的・生物的環境世界を含み込んだものが、ムスリムのネットワークとシステムによってつなぎ止められ、確立していったものであると思われる。その中では、とりわけ東西交易のネットワークを機能させるにふさわしい拠点である都市が、重要な意味を持つ。そしてそこに成立した人間の行動パターンを見ると「属地性」よりは「属人性」が非常に顕著であり、地域内固定性より地域間移動性が相対的に高い構造を持っている。「イスラム世界」というものは、そのような「文化世界」と言えるだろう。

次に、中東地域についてである。「中東」という言葉は、20世紀初頭の産物で、ペルシャ湾を中心にしたインドへのアプローチの戦略的要点を指すことを意図して作り出された言葉に起源を有する。しかし、次第にその言葉が指し示す地域は西に移り、現代では若干の伸縮はあるものの、だいたい、東はイラン、アフガニスタンから、西はモロッコに至るまでの地域をさす。実はこの地域は、多くの局面においてイスラム世界の文化パターンを創出した、いわば文化パターンの発信源であった。従って、イスラム世界に於ける文化的なコア地域をさす概念として、「中東地域」という言葉が定着していった。中東の概念は、当初の欧米中心の純戦略的な概念から、よりイスラム世界の歴史に内在的な、イスラム世界の文化的、歴史的展開過程に即したある実体を指す概念へと変化していったのである。

「中東地域」というのは同一の世界観をもった人々の世界全体を指すものではなく、イスラム世界のある一片を指す概念として成立している。しかもその中に、さらにサブ文化圏として、先にも触れたアラブ圏、イラン圏、トルコ圏という三大サブ文化圏が存在している。さらに物理的・生物的環境についても様々なユニットに分ちうる。その意味ではイスラム世界全体のみならず中東地域そのものが、意味の体系の面においても、物理的・生物的環境の面においても複合体である。「中東」自体が、いくつもの「世界単位」からなると考えるのかも知れない。

次に、「内」と「外」そして「重層性」の問題に少しだけ触れておきたい。地域研究として東南アジアが論ぜられる際に、「重層性」が非常に強調されている。確かに、土着的な世界があり、そこにヒンドゥー・仏教系の文化が入り込み、次にイスラム文化、そして近代西欧文化が入り込んできたのであり、文化の重層性が可視的な形で歴史的にもたどりうるし、現代についてもそれを容易に検証しうる面があるかと思う。しかし、イスラム世界自体、さらにそのコアであった中東地域においても、実はかなりの程度において重層性論が当てはまる。すなわち、イスラム世界においても、古代オリエント、ギリシャ・ローマ・ヘレニズムの文化、そしてイスラムが重なる。さらにトルコ地域の場合には中央アジアに起源を持つトルコ的な伝統が入り込み、それが生き残っている。バルカンの場合にはヘレニズム、ビザンツをつきぬけて、あるバルカン研究者の研究によれば、新石器に遡るようなバルカン的な地域特性もまた庶民の身近な生活文化中に生き残っている面があるとされる。このように、中東地域においても、程度の差はあれ、「重層性」を識別することは可能かと思われる。ただイスラム世界、特にそのコア地域の場合には、イスラムのもとに、より密接な形で融合されているため、重層性が見えにくくなっているケースが多い。そのために、イスラム世界における文化の重層性については研究も少ないのではないかとも思われる。

また、「内」と「外」についてであるが、これもまた、特に東南アジアについて、厳然とした「内世界」があり、「外文明」との接触が起こり、外文明が内世界の中に沈澱していくという構造を持っていると論じられている。その場合、もちろん東南アジア側から見れば、イスラムは外文明であるという形で位置づけられている。しかし、この点でも、イスラム世界の中においても同じようなメカニズムが存在している。非常に多くの価値の発信源になった中東地域においても、それまでにあった様々なものを融合して内世界を形成したのである。そして、そこに外からの影響が入り込んでくるという過程をも識別できる。従って、イスラム世界においてもやはり、「内世界」と「外文明」の相互関係のダイナミックスというものは捉えうる。

私は、「イスラム世界」という独自の「文化世界」の存在を強調したい。しかし同時に、東南アジアについての地域研究の中でつむぎ出されてきた諸方法および諸基本概念が、全く異質の歴史的文化的環境および物理的生物的環境に根ざしているイスラム世界においても、少し観点を変えれば適用が可能な概念枠組み、分析のための道具ともなりうるということにも言及しておきたい。

コメント

家 島 彦 一

鈴木さんの発表は「世界・文化・文明」をめぐる、とくにイスラーム世界を事例に話されたが、いずれも大変に大きな問題であって、それらを一つひとつコメントし、私の意見を述べることは難しい。そこで、私の場合は、「文化・文明」という概念を考える出発点として、イブン・ハルドゥーン「文明論」を、ここで少し紹介しておきたいと思う。文明・文化という言葉、どういうふうアラビア語に当てるかは、いろいろと問題があると思うが、私はイブン・ハルドゥーンの中に出てくる「ウムラーン(‘umrān)」という語を「文化」と訳し、「ハダーラ(ḥadāra)」を「文明」と訳すのが適当だと考えている。

アラビア語のウムラーンの使い方は多様であるが、哲学者の一般的な解釈としては〈社会的結合、都市、文明〉などであり、一方、地理学者の解釈としては〈居住世界(ard ma‘mūra)〉であって、ウムラーンの反対の意味がハラーブ〈非居住世界(kharāb)〉である。これらに対してハルドゥーンは、「ウムラーン」について特別の意味づけをおこなっている。つまり〈人間が自然と共生し食物を得て生存し、しかも野獣やその他の敵から身を守るために必要となる最低限の社会的結合、人間が本性的に持つ相互扶助(ta āwun)のための集団、生きるための素朴な生活形態を基準にした集団構成、生活のあり方〉とする解釈である。このように彼は、ウムラーンを場所と自然と人間というものが総合的に結びついた意味で使っているわけだから、まさに人類学的な意味での「文化」と考えていいと思う。従って、農民や遊牧民は、都市の人間よりもウムラーンの原点に近い本性的、根元的、自然的な生活者となる。

一方、彼は、「ウムラーン」の付加的要素(ziyāda)として「ハダーラ」という言葉を使っている。つまり、それは〈王権の形成、国家秩序、さらには人間が様々な営為や努力によって追求しようとする利得や奢侈な生活、学問、商売、技術、堅固な建物、洗練された衣服や料理、絨毯、容器、その他の趣向的生活〉などをさしている。そしてハダーラが実現できるのは、都市—この場合の都市は強力な王権があって、人口が稠密で、安全・守備が得られる場所を指す—である。つまりハダーラというのは、普遍化、システム化、パターン化された都市の文化、熟練度(kathrat al-tafannun)の高い文化であって、そういう都市文化に遊牧民が強くあこがれること、それは同時に都市の征服と破壊によって文明が拡散していく過程でもあるが、そうした歴史展開のダイナミズムをイブン・ハルドゥーンは積極的に捉えようとしているのである。

私は、文明の特徴には、二つのタイプがあるのではないかと考えている。一つは、外に向かって積極的に広がっていく拡散性・挑戦性をもった文明。この文明は非常に洗練された都市文明のシステムであって、イスラームではシャリーアやアラビア語、それに伴う生活技術・作法等と、そして強烈な世界観を持っている。イスラームには特にそうした文明システムが拡散する戦略として、rihla(旅)・hijra(移動)・hajj(メッカ巡礼)などがある。したがって、イスラームは旧大陸に拡大し、イスラームの世界の広がりというものができあがった。

また、文明の挑戦性という意味では、西ヨーロッパの近代文明システムが挙げられる。特に16世紀以後の西ヨーロッパ文明を考えると、そこには挑戦的、独占的、排他的な特徴があり、世界制覇を目指すというような文明形態である。その他にも〈中国文明〉が挙げられる。これは華夷秩序のもとに周縁に向って、統合と秩序を築いていく文明タイプである。それから、〈インド文明〉のように宗教、儀礼、階級システムによって統合と秩序を保つ文明タイプもある。

もう一つのタイプの文明は、文化と言った方がいいのかわからないが、内的に充足するような受身の文明であって、中緯度の大文明圏の外に位置する周縁文明(文化)というものである。とくにユーラシア大陸外縁に広がる〈海域世界の文明〉というものがあげられる。東南アジアにしても、インド洋海域世界にしても、このタイプの文明を持っている。これらの地域は、大文明を受け止める性格を本来的に持っている地域と考えられる。

次に質問であるが、ご承知のようにオスマン帝国というのは1299年にアナトリアの一角に興り、以後色々な歴史的な紆余曲折はあるが、1922年までのまさに600年という大変長期的な政治統治を誇ってきた。しかも地理的な領域でいえば、バルカン、アナトリア、中東、東地中海というものがほとんど完全にこのオスマン帝国領域下に入り、また、オスマンの外交、政治的と言うか、一面では経済通商的な関係まで含めれば、オスマンの周辺に広がる大きな世界がある。この意味において、オスマン帝国は、歴史の上では未曾有な大帝国、地理的な広がりといい、歴史的な持続性といい、大変な国家を作っている。私は、一つの国家の持続性というものは、だいたい人間の寿命で言えば3世代、90年から100年、それから社会・経済・文化の繁栄中心の移動は、もう少し長くて150年から200年というタイム・スパンを考えているので、そうした基準から見てもオスマン史は歴史の上で非常に特異だと思う。こういう視点からすると、オスマン帝国が、歴史の上でそれを可能にした条件は何であったのか。そういうオスマン帝国の力の論理というものを少し説明して頂きたいと思う。

質疑応答

弘末 18～19世紀以降イスラム世界においては、イスラムという意識が強く出ることによって、イスラム世界に属しているそれぞれのサブの世界の人々の意識はどうなったのか。

例えば、メッカに巡礼した東南アジア海域世界の人々のような場合、彼らがムスリムの家にあるという一体性が強くなるということ、サブの世界に属しているということがどういうふうになっていくのか、弱まるのか、逆に意識されてくるのかを伺いたい。

鈴木 イスラム世界と西洋世界の力関係は、16世紀までは東方優位で、17世紀を通じて西方優位に転化し、18世紀に西方優位がほぼ確立していった。問題の18～19世紀においては、カリフ制度が、再び可視的な形のイスラム世界の普遍性のシンボルとなっていった。カリフ制度は、かつて1258年にモンゴルによってバグダードが征服された時に実在の制度としては殆ど消滅した。しかし、その後においても、イスラム世界の普遍性の理念は少なくとも聖法シャリーアに置き換えられた形で、生き続けていた。それに加えて、イスラム法学者達の、国境及び地域を越えた移動性は残っていた。このことが一つ言える。16世紀から18世紀にかけての時期について言うと、北インドにムガル帝国、イランにシーア派のサファヴィー朝、アナトリアからアラブ地域にかけてスンナ派のオスマン朝が並立するに至った。このためこの時期は、イスラム世

界の歴史の中では相対的に王朝及び国家の垣根が高くなった時代でもあった。

しかし他方で、イスラム世界は西欧の衝撃にさらされ始めた。そのような状況の中で、観念上のイスラム世界の統一性の理念というものは、少なくともエリート層のある部分においては、むしろ再認識されるようになっていったかと思われる。しかも、対外的な圧力を意識的に利用しようとする面もあった。その点では、イスラム世界の普遍性と、ムスリムとして同胞の連帯性の意識は、ある局面で強まるという面があったと思う。ただその際、中東だけに関して見ても、現実の西欧の台頭に対して、文化的な理念の問題だけでは到底対応できないという認識も生まれてくる。そして軍事技術を中心とした技術面が問題になり、やがて近代西欧のモデルを取り込み始めた。

さらに、それをいかにして体系的に取り込んでいくかということが問題になっていった。

19世紀初頭に、まずオスマン朝の中で自立化していたエジプトとその本国であるオスマン帝国が西洋の技術を体系的に取り入れるようになる。その際、新しい担い手が生み出されていくが、彼らは、近代西欧的意識とイスラム的伝統意識を併せもった人達だった。そして次の第三世代になると、むしろ近代西洋の方に強く身を置いた人達が現れ、しかも各社会内の政治のヘゲモニー争いの中で、そ

う人達がヘゲモニーを握っていくという事態が進行する。そうになると、一方では、むしろイスラム的な普遍性と連帯性の再認識というものは、一握りのエリートの操作的シンボルとして、利用されるようになる面も生じていった。しかし、また他方では、素朴な民衆の中における危機への対応として再認識されていくという面があったかと思う。

19世紀の末から20世紀の初頭にかけて、かなり厚い層を成した新中間層が生まれると、民族主義としてのナショナリズムというものが入り込んでくる。しかしナショナリズムが発展してくると、そこでは地域的な特異性を、

とりわけ民族の面において再認識しようという意識が生じてくる。その上で普遍性が考えられるようになる。この問題は、おそらく中東と東南アジアだけではなくおそらくギリシャ文字・キリル文字圏においても同様であったと思う。中東の場合にもやはり両者の拮抗する面と、共鳴する面の二つが進行した。

しかし20世紀初頭から1970年代までの時期には、ナショナリズムと世俗化と近代西欧モデル志向が、前面に出て来ていた。この時期には、むしろ民族的特殊性の方がイスラム的な普遍性を越えて主張されるようになっていったのではないかと思われる。



祈るイスラーム達（テヘラン）